武蔵野日曜聖書講筵

テサロニケ伝道・アテネ伝道

――使徒行伝第17章――

１９９１年10月20日
小池辰雄

テサロニケ伝道　アテネ伝道　アレオパゴスでの演説　神の中に生き動きまた在る　楽しくてしょうがない　大きな宇宙的な魂　ひっくり返り

【使徒17】

1 斯(かく)てアムピポリス及びアポロニヤを経てテサロニケに到る。此処にユダヤ人の会堂ありたれば、2 パウロは例のごとく彼らの中に入り、三つの安息日(あんそくにち)にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明して、3 キリストの必ず苦難をうけ、死人の中より甦(よみが)えるべきことを述べ『わが汝らに伝うる此のイエスはキリストなり』と証せり。4 その中のある人々および敬虔(けいけん)なる数多(あまた)のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに従えり。5 ここにユダヤ人ら嫉(ねたみ)を起こして市の無頼(あぶれ)者をかたらい、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を囲みしが、6 見出さざれば、ヤソンと数人の兄弟とを町司(つかさ)たちの前に曳きゆきたり呼ばわりて言う『天下を顛覆(くつがえ)したる彼の者ども此処にまで来れるを、7 ヤソン迎え入れたり。この曹輩(ともがら)は皆カイザルの詔勅(みことのり)にそむき他にイエスと云う王ありと言う』8 之をききて群衆と町司たちと心を騒がし、9 保証を取りてヤソンと他の人々とを釈(ゆる)せり。

10 兄弟たち直ちに夜の間にパウロとシラスとをベレヤに送りいだす。二人は彼処につきてユダヤ人の会堂にいたる。11 此処の人々はテサロニケに居る人よりも善良にして心より御言をうけ、この事正しく然るか然らぬか日々聖書をしらぶ。12 この故にその中より多くのもの信じたり、又ギリシヤの貴女、男子にして信じたる者も少からざりき。13 然るにテサロニケのユダヤ人らパウロがベレヤにも神の言を伝うることを聞きたれば、此処にも来りて群衆を動かし、かつ騒がしたり。14 ここに兄弟たち直ちにパウロを送り出して海辺に往かしめ、シラスとテモテとは尚ベレヤに留まれり。15 パウロを導ける人々はアテネまで伴い往き、パウロよりシラスとテモテとに、疾(と)く我に来れとの命を受けて立ち去れり。

16 パウロ、アテネにて彼らを待ちおる間に、町に偶像の満ちたるを見て、
その心に憤慨を懐く。17 されば会堂にてはユダヤ人および敬虔なる人々と論
じ、市場にては日々逢うところの者と論じたり。18 斯てエピクロス派、並び
にストア派の哲学者数人これと論じあい、或者らは言う『この囀る者なにを
言わんとするか』或者らは言う『かれは異なる神々を伝うる者の如し』是は
パウロがイエスと復活とを宣べたる故なり。19 遂にパウロをアレオパゴスに
連れ往きて言う『なんじが語るこの新しき教えの如何なるものなるを、我ら
の知り得べきか。20 なんじ異なる事を我らの耳に入るるが故に、我らその何
事たるを知らんと思うなり』21 アテネ人も、彼処に住む旅人も、皆ただ新し
き事を或は語り、あるいは聞きてのみ日を送りいたり。22 パウロ、アレオパ
ゴスの中に立ちて言う、

『アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬う心の篤きを見る。
23 われ汝らが拝むものを見つつ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記した
る一つの祭壇を見出したり。然ば我なんじらが知らずして拝む所のものを汝
らに示さん。24 世界とその中のあらゆる物とを造り給いし神は、天地の主に
在せば、手にて造れる宮に住み給わず。25 みずから凡ての人に生命と息と万
の物とを与え給えば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事うることを要
し給わず。26 一人よりして諸種の国人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、
時期の限りと住居の界とを定め給えり。27 これ人をして神を尋ねしめ、ある
いは探りて見出す事あらしめん為なり。されど神は我等おのおのを離れ給う
こと遠からず、28 我らは神の中に生き、動きまた在るなり。汝らの詩人の中
の或者どもも「我らは又その裔なり」と云える如し。29 かく神の裔なれば、
神を銀・金・石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思うべきにあらず。
30 神はかかる無知の時代を見過ごしに為給いしが、今は何処にても凡ての人
に悔改むべきことを告げたもう。31 さきに立て給いし一人によりて義をもて
世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に
与え給えり』

32 人々、死人の復活をききて、或者は嘲笑いしが、或者は『われら復この
事を汝に聞かん』と言えり。33 ここにパウロ人々のなかを出で去る。34 されど
彼に付随いて信じたるものも数人あり。其の中にアレオパゴスの裁判人デオ
ヌシオ及びダマリスと名づくる女あり、尚その他にもありき。

●テサロニケ伝道
17章です。

と、簡単に書いてありますが、トロアスから船でネアポリスへ、それからピリピ、アムピポリス、アポロニヤ、テサロニケに到る。全体で百キロ位ある。テサロニケは、パウロの最初の手紙を書いた教会です。テサロニケ書翰を見ると、伝道の事も書いてあります。非常に、信頼してますね、なかなかいい信者がたくさんできたらしい。

1斯てアムピポリス及びアポロニヤを経てテサロニケに到る。
此処にユダヤ人の会堂ありたれば、2パウロは例のごとく彼らの中に入り、
三つの安息日にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明して、

三週間にわたって、旧約聖書を論じた。もちろん、キリストの角度から旧約を見ていますから。

3キリストの必ず苦難をうけ、死人の中より甦えるべきことを述べ
キリストが必ず十字架にかかって、それから甦ること。「べき」とは、「どうしてもそうなる」ということ。「何々すべし」という、あの「べし」とは違う。「必ずそう成る」という「べき」です。
『わが汝らに伝うる此のイエスはキリストなり』と証せり。

なかなかみんな、特にユダヤ人は、これを「キリスト」と思わないですから。

「イエスがキリストだ」

と言うと、また必ず反対する奴がでてくる。「メシヤ」「救主」ということですから。

4その中のある人々および敬虔なる数多のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに従えり。

大体、婦人の方が多かったようです。今でもそういう傾向が多いけれども。男はなかなか理屈っぽいものだから、簡単に受けとらない。信仰の世界は簡単に受けとる方がいい。私はもう、実に簡単に受けとってしまったんだ。内村先生の本を読んだだけで、グッときちゃったから。

5ここにユダヤ人ら嫉を起こして市の無頼者をかたらい、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を囲みしが、

「ヤソン」というのは、どうも、パウロの親戚関係らしい。「ヤソン」という名前はロマ書の一番終りの方にも出てきます、「よろしく言ってくれ」なんて言ってね。

6見出さざれば、ヤソンと数人の兄弟とを町司たちの前に曳きたり呼ばわりて言う『天下を顛覆したる彼の者ども此処にまで来れるを、7ヤソン迎え入れたり。この曹輩は皆カイザルの詔勅にそむき他にイエスと云う王ありと言う』

だから、イエスは政治犯だ、というようなわけだ。それの味方をして、とんでもない奴だと。

「天下を顛覆したる」

という言い方が面白いですね。本当にひっくり返してしまったから。覆すような大騒ぎを

した、という意味なんです、彼らの言い方としては。だけれども、本当の意味で覆したというわけだ、ひっくり返しちゃったから。

ゴルバチョフも、覆したやつだ。ペレストロイカというのは、自分自身が覆ったわけです。自分自身が、共産党から出てしまったわけです、

「レーニンは大間違いだ」

というわけで。レーニンにはレーニンの歴史的な意味はもちろんあるけれども。人間の大事な面を欠いている。それで共産主義は大きな間違いをしたと。彼自身がひっくり返ると、今度は、周りをひっくり返すわけだ。みんなそうです。ルターがそうです。ルター自身がひっくり返ったら、宗教改革が起きた。自分がひっくり返らないで、人をひっくり返そうなんて、これはダメなんでね。

私もひっくり返したわけです。それで、無教会から出てしまった。私が結婚の司式したのが幾組もあります。ところが、それが私と一緒にひっくり返らないで、相変わらず無教会にいたところが、その終りはみんなダメです。私が結局、勝っている。これはもう、聖霊の戦いの勝利を事実をもって証明しています。だから、私は何も恐れないです、み霊は強いから、何といっても。

天下をひっくり返す。パウロは自分自身がキリストに見事にひっくり返された。パウロくらい、ひっくり返りの素晴らしいものは、他に歴史的に無いでしょうね、おそらくこんな鮮やかなのは。キリストの大反対の親玉が、今度は味方の親玉になった。人生は、本当にそこまでこないと。

8之をききて群衆と町司たちと心を騒がし、9保証を取りてヤソンと他の人々とを釈(ゆる)せり。

10兄弟たち直ちに夜の間にパウロとシラスとをベレヤに送りいだす。二人は彼処につきてユダヤ人の会堂にいたる。

いつもシナゴーグで語る。シナゴーグで語るんだが、ユダヤ教を語るのではない、福音を語っている。だから、しょっちゅう、そこで問題が起きるわけだ、ユダヤ人との間で。ギリシヤ人はいいんです。ユダヤ人がいつも問題を起こす。

11此処の人々はテサロニケに居る人よりも善良にして心より御言をうけ、この事正しく然るか然らぬか日々聖書をしらぶ。12この故にその中より多くの者信じたり、又ギリシヤの貴女、男子にして信じたる者も少からざりき。

インテリの女の人らしいね、「ギリシヤの貴女」なんて書いてある。

●アテネ伝道

13然るにテサロニケのユダヤ人らパウロがベレヤにも神の言を伝うることを聞きたれば、此処にも来りて群衆を動かし、かつ騒がしたり。14ここに兄弟

たち直ちにパウロを送り出して海辺に往かしめ、シラスとテモテとは尚ベレヤに留まれり。15パウロを導ける人々はアテネまで伴い往き、パウロよりシラスとテモテとに、疾く我に来れとの命を受けて立ち去れり。

16パウロ、アテネにて彼らを待ちおる間に、町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐く。

アテネもコリントも非常に異教的な色彩の強い所ですから。それから、アテネはその当時の文化都市でもあって、非常に哲学においても有名な所ですね。プラトンが大分滞在した所です。

17されば会堂にてはユダヤ人および敬虔なる人々と論じ、市場にては日々逢うところの者と論じたり。

とにかく、ギリシヤ人は論ずることが好きなんだ。議論倒れといってね、議論ばかりして、結論がでても、また議論を繰り返す。何も行為に出てこない。それで終いには、ギリシヤは非常に文化的にもダメになってしまった。ソフィストになっては、もう曲がってきたからね。それ以前の、ソクラテス、プラトン、アリストテレスあたりの思索は、世界で最高峰のところです。この三人で、哲学のあらゆる問題がもう論じられたと言われるくらいですから。

18斯てエピクロス派、

エピキュリアンは、「快楽主義」なんて訳しますが、いわゆる快楽ではない。

「本当の意味で楽しいということが一番大事なんだ」

という気持なんです、本当はね。

並びにストア派の哲学者

これは、非常に厳格で、自分との戦いの強い派です。エピクロス派とストア派というのはちょうど対立する二つの派です。福音は、エピクロス派もストア派も、いい意味においては両方持っています。悪との戦いにおいては、ストアにも負けない。それから、本当に福音を歓ぶ楽しみにおいては、エピクロスにも負けないです。

数人これと論じあい、或者らは言う『この囀る者なにを言わんとするか』さっきのは、「騒がす者、ひっくり返す者」だが、今度は「囀る者」だ。

或者らは言う『かれは異なる神々を伝うる者の如し』是はパウロがイエスと復活とを宣べたる故なり。

「神々」ではない、ひとつも。神だの、キリストだの言うものだから、神々なんて言ったんでしょう。キリストも神だ、なんて言うものだからね。

●アレオパゴスでの演説

19遂にパウロをアレオパゴスに連れ往きて言う『なんじが語るこの新しき教

えの如何なるものなるを、我らの知り得べきか。20**なんじ異なる事を我らの耳に入るるが故に、我らその何事たるを知らんと思うなり』**21**アテネ人も、彼処に住む旅人も、皆ただ新しき事を或(あるい)は語り、あるいは聞きてのみ日を送りいたり。**

「アレオパゴス」というのは、ギリシヤ語では、「アレイオス　パゴス」ですね、「アレイオス」というのは「アレース」という軍神、戦の神さま。星でいうと火星です。英語でいうと「マース」。「パゴス」は丘という意味です。「軍神の丘」という意味です。そこに古くから議会がありまして、定期的な最高会議をよくそこで開いたそうです。そこでもって今度は演説したわけだ。

22パウロ、アレオパゴスの中に立ちて言う、

『アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬う心の篤(あつ)きを見る。

まあ一応、相手をあげておいてね、

23われ汝らが拝むものを見つつ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出したり。

「アグノース　トー　テオー」、「ア」というのは否定ですから。「アンノウン　ゴッド」、「ウンベカンテン　ゴット」、「知らざる神」です。

「だけれども自分は知っている」

というわけだ。ギリシヤ語は複数ですよ、本当は。

然ば我なんじらが知らずして拝む所のものを汝らに示さん。24**世界とその中のあらゆる物とを造り給いし神は、天地の主に在(ましま)せば、手にて造れる宮に住み給わず。**

列王記略の第8章にも出ている。

25みずから凡ての人に生命と息と万(よろず)の物とを与え給えば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事(つか)うることを要し給わず。

非常にはっきり書いてあるな。そういう創造主です。

「生命と息と万(よろず)の物とを与え給えり」

と。我々が生命があるのも、息をしているのも、みんなこれは神さまのおかげだと。非常に人格的に書いてある。人格的に書いてあるといったって何か偶像を思ってはダメです、我々が何かを具体的に思う時には。キリストは神さまのことを「父よ」と言った。何かそういう幻を見ているわけじゃない。具体的な表現です。

「神は霊なれば」

という。「父よ」というのは、人間が本当に信頼すると、人間らしく信頼すると、非常に人格的なものがそこに出てくる。それから、「霊である」と。だから、私が言っているように、

「無相の相」

相無き相だ。神さまは、これを描こうとしたって描けない。無相であるけれども、「父」と言うときには、これは「相」なんだ。「相」だけ見ていると、これは偶像になる。「無相」だけやっていると、ヘタすると観念になってしまう。偶像でもなければ、観念でもない。それが、宗教的神秘の世界です。我々が祈るのだって、そうでしょ。祈りは具体的に、「お父さま」とか「キリスト、主さま」とか言って祈っているわけだ。

「みんなが祈っていて、キリストは一緒にそんなものを聴けるか」

と、そういうことではないんだ、宗教の世界は。

「いくらキリストが偉くたって、同じ時に、百も二百も祈られて、それが聴けるか」

と、普通の次元だったら、そう思うでしょ。そういう五感的な次元とは違う。だから、信仰の世界は、普通のいわゆる科学的な思惟をする人には受けとれないのは無理もない。科学的思惟では受けとれない。単なる道徳の世界でもダメ。単なる文学でもダメ。もうひとつ凄い次元だ。

そういう次元にいて、非常に具体的に動いていたのが、イエス・キリストです。普通の人間のようにね。しかし、中身はもの凄い。そこが本当の聖霊の世界です。聖霊の力の世界。普通の信仰で力がないのは、その次元にきていないから。

だから、神さまは宮も要らなければ、神殿も要らなければ、何か上げようたって、神さまがみんなそれを自分でお創りになった世界だ、みんなこちらが頂いている世界だと。そう言っているんだ、パウロは。こっちは受けとるばっかりだと。存在そのものがいただいているわけだ。

ところが、今は「民主主義」とか言ってね。私は書いたでしょ、

「神なき民主主義はダメだ。アンダー　ゴッド、神さまの下でなければ」

と。これはリンカーンの有名な演説の中に出ている。ゲチスバーグの戦いの後の「三分間演説」という。日本には人物がいない。西郷南洲が歎くよ、

「俺は敬天愛人と言ったのに、一人も天を相手にしていないな」と。

26 一人よりして諸種（もろもろ）の国人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期（とき）の限りと住居（すまい）の界（さかい）とを定め給えり。27 これ人をして神を尋ねしめ、あるいは探（さぐ）りて見出す事あらしめん為なり。されど神は我等おのおのを離れ給うこと遠からず、

遠からず、近きにあり。

「道は近きにあり」

と、孔子も言ったけれども。「燈台もと暗し」という。光は近きにあり。

●神の中に生き動きまた在る

その次の28節が極めて大事な節です。今日のお話の中心はそこです。

28 **我らは神の中（うち）に生き、動きまた在るなり。汝らの詩人の中の或者どもも「我らは又その裔（すえ）なり」と云える如し。**

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」

と、ギリシヤ語もその通りです。

「エン　アウトー　ガル　ゾーメーン　カイ　ケヌーメタ　カイ　エスメン」

「ガル」、何となれば。「エン　アウトー」、彼の中に。「ゾーメーン」、我々は生きている。「カイ」、そして。「ケヌーメタ」、動いている――「キノマ」というでしょ、「キノマタグラフ」、活動写真という――「エスメン」、我々は在る。

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」

と。我々には、具体的にこの「神」はキリストです。

「我らはキリストの中に生き、動きまた在るなり」

と。これが、

「キリストの中に」「エン・クリスト」

ということ。「エン　アウトー」「彼の中に」の「彼」はキリストだ。ここでは、日本語では「神」と書いてあるけれども、「彼の中に」と書いてあるんですよ、ギリシヤ語は。

この言葉はゲーテが非常に好きだった。ゲーテという人は、注解書なんか要らない。彼は本当に聖書を体で読んでいた人です。だから、偉大な詩人なんですよ。「聖書を読むと狭くなる」なんて、冗談じゃないよ。

「ゲーテを見ろ。生涯を通してゲーテは聖書に親しんだ」

と、ドイツのある人がはっきりそう言っている。シェークスピアだって、ユーゴだって、ブラウニング、ドストエフスキー、とにかく一流の人はみんなそうだ。日本には、一番大事な絶対界が抜けているから――抜けてない人もありますよ、仏教の方でね――それではダメだ。宮本武蔵や白隠の絵が何故素晴らしいかというと、そういう境地で書いているから。生命がある、力がある。もうとにかく、何らかの意味において、絶対界との交わりのない魂では、一番素晴らしいものは出てこない。これはもうはっきりしている。音楽でもそう。バッハ、ベートーベン、シューベルト、メンデルスゾーン、みんなそう。ドイツの古典音楽が何故素晴らしいかというと、そういうわけだ。その素晴らしいもとを知らないで、やれベートーベンだ、やれバッハだ、なんて言ったって、ダメなんだよ、日本人は。文学の方でもね、何でもそうなんだ。哲学でも何でも。偉大な哲学、カント哲学でも、彼は深い信仰を持っている。

「哲学の限界はここまでだ」

と、はっきり言っているんだ、彼は。プラトンなんていうのは、そうった霊界的なところを既に直感しているような哲学者だから、あれは凄いね、やっぱり。プラトン、ソクラテス、アリストテレス。アリストテレスはちょっとズレているが、まぁまぁその三人は。「ダイモ

ニオン」の世界だね。

私たちは、この使徒行伝の17章28節、この句をジッーと見ているだけで、力がきてしまう。眼光紙背に徹するという。キリストの中に生き動きまた在れば、いわゆる生きた死んだ、なんていう相対的なものはもはや問題なくなってしまう。死を乗り越えてしまう。

「私はキリストの中に生き動きまた在りますから、何でも来てください。どんな事でも来てください、絶対に負けませんよ。この現実は、何ものも覆すことができない現実です」

と。それでなければ、

「信仰、信仰」

なんて言ったって、しょうがないよ、これ。もう「信仰」なんて言葉は要らない、何も。

「私は信仰はありません。私はただ、キリストの中に生き動きまた在るだけのはなしです」

と。それでいいんだ。

●楽しくてしょうがない

みんな、詰まらないような顔しているが、つまらなくないんだ。私は面白くてしょうがない。楽しくてしょうがない。さっきの「エピクレアン」なんだ。楽しみの哲学なんだ。楽しみの楽園だから。福音はエピクレアン以上の楽しい世界だ。何が来たって、笑っている。そういう人があるよね。いろんな艱難に遭って、この人は随分辛い目にあっているんだが、しょっちゅうニコニコしているなぁと。勝っているんだ。そういう女の人は素晴らしいよ、本当に。すぐ仏頂面したり、怒ってみたり、それはダメだ。いつもニコニコしてないと。つくったってダメだよ、自然にそうならなくては。

「そんなものはお相手になりませんので、私はキリストの中でうれしいんです。どう扱われようが一向差し支えないんです」

と。そうしてごらん。病気というけれども、「気が病む」んだからね。気が病むと、それこそダメになる。「健気」だよ、気が健やかで、「楽気」でもいいや、気が楽になっていると、病がスーッとどこかへ逃げていってしまう。

「こうなるだろうか」

なんて心配するのが、自分で自分をダメにしていく。

私は高等学校時代に胃腸をこわしてしまって、あの薬この薬と飲んでいた。ある時、これは薬に捕らわれているなと思って、全部棄ててしまった。そうしたら、元気になってしまった。薬は毒なんだよ。キリストの霊気を吸って、讃美歌を歌っていれば、治ってしまう。あなた方、普段、讃美歌を歌っているかい？　まぁ、声は出さなくても、心の中で歌っていなければダメだよ。

「もう私は讃美歌の本は要りません。全部暗記しています」
なんて。私はなかなか暗記ができないんだけれどもさ。
「われはキリストの中に生き、動きまた在るなり」
と。ゲーテはそういう人だ。鳥や虫のはてに至るまで全部、神さまの愛の生命が来ている。彼は、愛の区別をしないんだからね。愛は、恋愛であろうと何の愛であろうと、全部、神さまから来ていると。その神さまから来ているところから外れると、みんなおかしなことになる。それを分類してね、こういう愛はいい、ああいう愛は悪い、と分類しているうちはダメなんだ。神学者が分類しているけれど、分類は要らない。
「みんな神からのものだ、何を言っているか。人間のいただいているものは、理性でも感性でも悟性でも、何性でも全部、神さまから来ているから」
と。そうだよ、いただいてないものはないんだ。ところが、カント哲学で、
「理性と感性とは喧嘩している。感性に負けてはいかん」
と一生懸命やっている。シラーが、
「そうじゃない。美わしき感性というものがあるんだ」
と。あの、シラーの「美学論」は素晴らしい。そういう世界だね、ゲーテ、シラーというのは。その基をつくったのは、やっぱりルターなんです。とにかく凄いよ、ドイツは。そのドイツの文化の素晴らしいさを――フランスはフランス文化の素晴らしいさはいろいろあります、それぞれの民族の素晴らしいものはあるんだ――それをいい加減にしている。

●大きな宇宙的な魂

大きくなってくださいよ、大きな魂に、宇宙的な。「宇宙的な」ということと、もの凄い「焦点を持っている」こと、この二つは矛盾しない。焦げるような点を持っていなければ、ダメなんだ、人間は。
この頃、私は雅号に「天弓」と書くでしょ、自分のことを。天の弓だと。これは漢文の中に出てくる。虹のことです。「虹霓（こうげい）」という。「虹」は雄の竜、「霓」は雌の竜。虹が二つ出る。上の方の薄い虹は、「霓」なんだ、下の方は「虹」なんだ。だから、二重に出る虹のことを「虹霓」という。漢民族というのは、竜を非常に霊獣としているから。日本人は、竜を見ると、余りいい感じはしないけれども。虹は本当は無色なんだ。角度でもって、プリズムみたいに、無色の太陽の光が七色に光る。本当は、無限色だね。
自然は素晴らしいよな。ゲーテは、
「大自然こそ本当に神の生きた本だ」
と言った。みんな、下ばっかり見ていたらダメだよ、空を見なくては。私は空を見るくせがあるね、「ああ、月が出ていた」と。この頃は朝、明けの明星がでる。一辺、早く目が覚めるんだよ、僕は。それからまた、寝るんだけれども。年を取っているせいか何かは知ら

んけれども。お陰さまで、星が見える。私はもう詩の世界に生きているから、自然科学的にものを見ない。

とにかく、みなさん、この聖霊をいただくと、一人一人素晴らしい世界が展開していきますから。人真似は要らん。聖霊の光でもって自分に相応しいようにしていきなさい。

「我らはキリストのうちに生き動きまた在るなり」

と。聖霊の内容は無限無量であります。

「全うした。完全になった」

ということは、ダメなんです。「完全」というと、それでおしまいなんです。おしまいの世界はダメです。私は、私の詩を完全とは決して言わない。

「これで私は書き終りました」

とは、言いたくない。

「まだ書き足りないでしょうがありません。仕方なしに筆をおきました」

と。内容は無限性を持たなければダメです。無限性なものこそが、本当の世界です。「これでいい」と言ったら、おしまいなんです。

「父の全きが如く、全かれ」

という、キリストの言葉があるが、あの「全さ」を、もしそういうようにとったならば、ダメなんだ。キリストはどういう意味で仰ったかは知らんけれども。「父の全さ」というのは、もう限りないことだよな。

「なかなか私は完全にいきません」

と、完全主義を一生懸命で追求している人があるよ。くたびれてしまうよ、そんなことをしたら。無限性の世界は、くたびれないんだ、これは。未完成交響楽がいいんだ、シューベルトが。ベートーベンも、「第九」を書いて、その次の「第十」を書こうと思っていたが、できなかった。彼もやっぱり限りなく進んでいる。ミケランジェロも最後の鑿を棄ててしまう。どこか未完成の所がある。これが本当の姿だと。文章もそうだよ。一生懸命で直してね、「これで完璧に」と、冗談言うなと。完璧になったら、文章は死んじゃうから。グーッと書いていく、それでもういい。

生きているものは、立派な造り花よりも、虫が食っているところの生きている花の方が本ものなんだ。聖霊は無限の霊ですからね、中身は限りない。その人その人の「らしさ」が、有限において無限を有つもの、これが本当の世界。三日月が満月を抱いている世界。

●ひっくり返り

29 かく神の裔なれば、神を銀・金・石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思うべきにあらず。30 神はかかる無知の時代を見過ごしに為給いしが、今は何処にても凡ての人に悔改むべきことを告げたもう。31 さきに立て給い

し一人によりて義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり』

「彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり」

と、凄いことが書いてあるな。「保証」というのは復活した保証のこと。

「悔い改める」という日本語の訳が、僕は嫌いなんだよ、何か消極的だから。「ひっくり返り」でいいんだ。ひっくり返りを求めたもう、ペレストロイカを求めたもう、ということ。何でも、ものは積極的に掴んでいってくださいよ。文字にとらわれないで。私は新約聖書の大胆な翻訳を、翻訳ならざる翻訳を書きたいくらいだ。パウロだって、少し整い過ぎている。こんなことを言うやつは他にいないだろうな、牧師さんたちは皆かしこまっているから。

だから、私は仕方がない、もう例外者だ。どこから見ても、僕は例外者だね。言うことも例外だし、87歳にもなって自転車に乗ることも例外だし（笑）。どういう人間だかね、これ。ばけものだね。

「もう、あんなバケモノのそばには居ない」

というなら、どうぞ出て行ってください。一向差し支えないです。そういう気合を、あなたがたは受けとってくださらなくては。その気合を、その人らしくね。

今日はただ、この17章28節という、「17・28」というのをしっかり身につけていただければ、もうそれで充分です。

「私はキリストの中に生き動きまた在ります」

と。「果たして在るだろうか？」なんて、そんなことを考える必要はないんだよ。そういう疑問をもったらダメなんだよ、これ。

「私を、キリストが捕まえて自分の中に入れています、生かしています、在らしめています」

と、これが本当なんだ。キリストの本願の力が私を生かしめている、在らしめている。生かざるを得ない、動かざるを得ない、在らざるを得ないという。逃げようたって、逃げられない。空気から逃げられないでしょ、みなさん。我々はキリストから逃げられないです。

「こんなにお前を私は追っかけて捕まえているじゃないか。どこへ行くんだ」

なんて。

「でも、私はダメです」

「ダメだから、私は捕まえているんだ」

と、こう言うんだ、キリストは。ダメなやつを、第三の罪びとの首を捕まえたんだよ、キリストは。私は第三の罪びとの首だ。パウロ、内村鑑三、小池辰雄。

私は、もう詩を書いていると、本当に地上にいないです。

それでは、おしまい。